

海鳥の仮剥製講座

佐藤 凱



仮剥製作製の様子



ハシボソミズナギドリ仮剥製

2026年7月19日と8月1日、ふじのくに地球環境史ミュージアムにて、NPO法人静岡県自然史博物館ネットワークの三宅隆先生による、駿河ほねほね団員向けの海鳥の仮剥製作講座が開催されました。仮剥製とは、生きている姿を再現した本剥製とは異なり、翼や脚を畳んだコンパクトな剥製です。本剥製より製作時間が短く、収蔵スペースも取らないため、博物館では多く作られています。私は山梨県の自然公園に勤め、環境教育活動で鳥の標本を活用しているため、自分でも仮剥製を作れるようになりたいと思い、受講しました。

私が参加した8月1日は、浜松周辺の海岸で採取され、冷凍保存されていたハシボソミズナギドリを材料に仮剥製を作りました。ハシボソミズナギドリは皮が厚く丈夫なため、初心者向きの材料として選ばれました。講座ではまず、三宅先生から標本を作り、残す意義と鳥の体測方法を教えていただき、体重、全長、尾長、嘴峰長、翼長、跗蹠長を計測しました。その後、胸の中央にある竜骨突起に沿って皮を切り開き、皮を剥いていきます。肩や首、脚を適切な位置で切り離し、肛門まで剥いたところで胴体から皮を切り離しました。

皮を剥ぎ終えた後は、皮に残す頭蓋骨から眼球や肉を取り除き、昼休みの間に頭蓋骨を

薄めた漂白剤に漬けて細かい肉を溶かします。昼休みには、三宅先生が考案されたフリーズドライによる剥製も見せていただきました。本剥製のように姿勢を再現しながら、仮剥製より簡単に製作できる方法で、とても興味深いものでした。

午後は頭蓋骨を流水で洗浄し、翼や脚の皮膚を靴下をめぐるように剥いで、骨についている肉を除肉しました。その後、防腐剤（ミョウバン1：ホウ酸2：ナフタリン2）を皮の内側と骨に塗布します。続いて、翼や脚の骨に徐肉した分だけ綿を巻き、首には綿を巻いた竹串を入れ、胴体にはきめ細かな発泡スチロールを削って作った芯を入れました。形を整えて胸の皮を縫い合わせ、紙の筒で翼を閉じたら完成です。

駿河ほねほね団の活動で解剖には慣れていても、切り開いた皮を元の形に戻す作業には苦労しました。一方、三宅先生は、まるで寿司職人が魚をさばくように、手際よく皮を剥ぎ、綿を入れて形を整えていました。その技術の高さに驚くとともに、長年の経験に裏打ちされた確かな技術を間近で学べる貴重な機会だと感じました。今回学んだ技術を忘れないよう、職場の標本用冷凍庫に保管している鳥でも仮剥製を作り、自然情報の蓄積と環境教育の教材づくりに活かしていきたいです。